

---

# ザ・プロジェクト その3

青木弘樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ザ・プロジェクト その3

### 【コード】

N0852S

### 【作者名】

青木弘樹

### 【あらすじ】

ある世界の物語。戦争が終わり、平和になった世界。そこでうめく陰謀と計画とは？世界は再び闇に包まれるのか…？

(前書き)

前回の続きです。

作：青木弘樹

三人はドルマンの家に入った。

「久しぶりだなハロルド。元気だったか？」

「はい。ドルマンさんもお元気そうで」

ドルマンは大柄な男だった。スキンヘッドで、威圧感もあった。年齢は55歳。

「後ろのお二人さんも、話は聞いているよ」

「はじめまして」

マシューとレイミアはドルマンと握手をした。

「うむ。かわいいお嬢さんだ。気に入ったよ」

「ありがとうございます」

レイミアは笑った。

「まあ、入りたまえ」

「はい」

ドルマンと三人は客間へと案内された。ドルマンはいわゆる執事のような者を雇っていなかった。以前雇っていた者が盗みを働いたからだ。もちろん警察に突き出して、しかるべき処置はしたが。まあ乱暴も少々…。

ドルマンは基本的に疑い深い人物だ。ハロルドも刑事じゃなかったら友人にはなっていないなかっただろう。友人と呼ぶには年齢が離れすぎているが、ドルマンは若い人間が好きだった。自分が優位に立てるというのもあるが、ドルマンは好奇心旺盛なので新しい考え方が好きなのだ。

「それで…だいたいの話は聞いているが、マシュー君、今まで体験したこと、知っていることを、とりあえず詳しく、事細かく聞かせ

「てくれ」

「分かりました」

マシューは今までのことを事細かく話した。

「なるほど…」

ドルマンは少し驚いていたが、そんなに大きくは驚いていなかった。

「ドルマンさん、突然の話ですぐに信じてはもらえないかもしれませんが…」

ハロルドが言った。

「いや、信じるよ」

「？」

「実はな…知ってるんだ。クロスバードのことは」

「えっ？」

「10年以上前だったか…政府関係者と名乗る者が来てな、月の資源探索に投資しないかと言ってきたんだ。面白そうだったんで少し投資したんだ。一度月に行った事もある」

「ほんとですか!？」

「ああ。その時あのクロスバードのマークが月の基地にあった。結局その5年後くらいに月の資源探索は打ち切りになったとかで、連絡も一切来なくなった。投資としては失敗だったが大した額でもなかったし、投資額の8割くらいは回収できたから気にもしていなかったんだが…」

「そんなことが…」

「テレビでクロスバードのマークを見たときは驚いたが…まさかそんな事態になっていたとはな」

「…」

政府関係者というのはもちろん嘘だろう。おそらくそうやって資金を集めていたのだろう。

「どこの誰かは知らんが、まったく人間というのは恨みつらみの多い生き物だな…」

「…」

みな、少し沈黙した。やがてハロルドが切り出した。

「まあ…そういうわけでドルマンさん、月へ行くためにミニ・シャトルを貸してほしいんです」

「月か…」

「お願いします」

レイミアが言った。

「ん〜、まあいいが…行ってどうするんだ？」

「細菌兵器を撒くためのミニ・シャトルを動けなくします」

「どうやって？」

「私が何とかします」

レイミアが言った。

「君も行くのか？心配だな」

「ミニ・シャトルの構造はだいたい知っています」

「だからドルマンさん、何か武器のようなものも貸してほしいんです。麻醉銃とか、催涙弾とか…持っていないませんか？」

「おいおい…」

ドルマンは困った。が、

「まあ…ぶつちやけ…確かに持つてるが…」

「…」

ハロルドは少しだけ驚いた。

「ハロルド、お前は行かないのか？」

「俺はこつちで大統領を何とかします」

「おいおい大丈夫か？」

「まだ3日あります。なんとか仲間を集めてやってみます」

「そうか…」

ドルマンは少し考えた。

「分かった。確かに戦争になったらお終いだ。私も手を貸そう」

「ドルマンさん！」

「ありがとうございます！」

「戦争は…戦争だけは防がなければな」

翌日。

ハロルドは警察の仲間や政府関係者で信用のおけると思われる者に事の真相を伝えた。そして、なんとかして大統領の自衛軍出動を食い止める努力をしていた。

軍に知り合いはいなかったが、軍を退役した知り合いが数人いたので話を持ちかけてみた。

ハロルドは自分にできる精一杯のことをしていた。

一方、マシユーとレイミアはドルマンに借りたミニ・シャトルに、今まさに乗り込もうとしていた。

「じゃあ、気をつけてな」

「はい。ありがとうございます」

「無茶はするなよ。危なくなったら帰って来い」

「はい」

「俺も自分に出切る事をやってみるよ。ガーランドの政府に親戚がひとりいる。ちょっと話してみるよ」

「はい、お願いします」

「じゃあな」

「はい。いつてきます」

マシユーとレイミアは宇宙用のスーツに身を包んでいた。

月までは約10時間ほどかかる。果たして無事つけるだろうか？そしてクロスバードの野望を阻止できるだろうか？不安と決意を載せたミニ・シャトルが、今飛び立とうとしていた。

ガーランド政府、ローランド政府は一触即発な状況にあった。双方7〜8人の政府要人の暗殺。容疑者とされる関係のない者の逮捕者も出ていた。一般市民で犠牲になった者はいないが、政府と国民との信頼関係も大きく崩れかけていた。

事態はクロスバードの望む方向へと流れつつあった。そして時間

だけがただ過ぎていった。

ここは月。

マシューとレイミアを乗せたミニ・シャトルは月の上空2キロの所まで来ていた。レイミアの操縦は見事なものだった。本気でパイロットを目指していただけはある。

月は当然、人の住める環境ではない。クロスバードの本拠地は人の住める環境を人工的に作り出しているはずだ。マシューたちはそれを探した。

月の上空1キロあたりから基地のようなものを探すミニ・シャトル。

「どこかしらね」

「割と広いからね。なかなか見つからないかも」

「しつかり探さないとね」

「ああ」

その時

「あっ！」

赤外線カメラで見ていたマシューが何かを見つけた。銀色の建物だ。

「あれかもしれない！」

「どこ？」

レイミアはマシューの指示で近づいた。そして目視でも見える距離まで来た。

「あれね」

「きつとあれだ！」

ミニ・シャトルは基地らしき銀色の建物に近づいた。

「…」

二人は無言だった。かなりどきどきしていた。

「よし…レイミア、慎重にね」

「ええ」

ミニ・シャトルはゆっくりと近づいた。建物のわきにミニ・シャトルらしきものも見えた。

「……」

二人は神経を集中した。しかし、その時！

”バーン！ドカン！”

「うわっ！」

「きゃあ！」

ミニ・シャトルは砲撃を受けた。

”ドドドドーン！”

「うわっ！」

「きゃあ！」

ミニ・シャトルは墜落した。といっても地上10メートルくらいから墜落したので、損傷はほとんどなかった。しかしその衝撃の強さに二人は気を失ってしまっていた。

ここは、とある大広間。

「うっ……」

マシューは両手・両足を縛られ、椅子に座らされていた。

「うっ……」

マシューは目を覚ました。しかしそこにレイミアはいなかった。

「うっ……ここは……？」

「よく来たな……」

誰かが話しかけた。

「誰だ？」

マシューは目を見開いた。

「私は導師ゼロ。クロスバードを……導くべき道へと導いてきた者だ」

「導師……ゼロ……」

その人物は車椅子に座っていた。年齢は70歳くらいだろうか。

老婆だった。マシューは少しだけ驚いた。てっきり男性だと思っていたからだ。

「マシユーよ、その棺には…ガダスが眠っている」  
「なに？」

マシユーはゼロの指をさす方向を見た。大きな棺があった。  
「ガダスは昨日、天に召された。細菌兵器にやられて以来ずっと病とたたかっていたのだがな…」

「…」  
「お前はここへ何をしにやってきたのだ？」

「決まってる。お前たちの野望を阻止しに…細菌兵器をまけないようにしに来たんだ」

「ほう…」

「お前たちのやっていることは、正義でもなんでもない！」

マシユーは強い口調で言った。

「ふふふ…正義か…」

「バカなことは止めるんだ」

「マシユー、お前がかつて住んでいた村は最後の悲劇の村と呼ばれているそうだな」

「そ、それがどうした？」

「ふむ。私がかつて住んでいた村は最初の悲劇の村と呼ばれている。もつとも、ほとんどの人々はそんなことなど誰も知らないが」

「な、なに！？」

「ガーランドにあった私たちの村は、細菌兵器製造段階で実験台にされ、そして滅ぼされたのだ」

「…！」

マシユーは驚いた。

「私はなんとか生き残ったものの、両足が動かなくなった。この髪の毛も自分のものではない」

「そんな…」

「また、細菌兵器を作った化学者たちも、口封じのため、そのほとんどが殺された」

「…」

「私は世界が理解できなかった。テレビを見れば平和、平和と並ぶ立てる政治家たち。死んでいった者たちのことなど気にも止めないかのようだった」

「理解できない世界を、このまま続けさせるわけにはいかない。しかし人は自分勝手な生き物だ。どうすれば戦争のない世界が作れるか…私はひたすら考えた。そして答えを得た」

「それは宗教だ。思想を統一し、欲望をコントロールするには宗教しかない。ようやく答えを見つけた私は人を集めた。戦争で悲惨な目にあつた者たちをグリーンランド、ローランドに限らず、男女に限らず、年齢に限らず、集めた」

「政府に殺されそうになつた化学者たちも集まってくれた。どんどんどんどん人は集まつた。正直、私以外に犠牲者がこんなにいるとは知らなかつた」

「マシューは言葉が出なかつた。

「正義などという言葉は勝つた人間の方便だ。何の意味もない。グリーンランド政府やローランド政府のやり方では、いずれまた戦争を起すはめになるだろう。そして多くの国民が犠牲になる。私はそれを未然に防ぐために政府のみをたたく。そして世界は…平和になるのだ」

ゼロは自信たつぷりに断言した。

「マシューはうまく言い返せなかつた。

「そんなことを言つて…お前たちは両政府を戦わせようとしているじゃないか。そうなつたら同じように国民の犠牲も出るだろう!？」

マシューは必死で反論した。

「そうだな。しかし我々が素早く細菌兵器を両政府のみにまきちら

せば、国民の犠牲は最小限で済む。マシユー、世の中にベストはない。ベターかワースト…選ぶなら当然ベターだ」

「く…」

「よく見てみる…われわれは活動の中で思い知った。うさんくさい依頼でも大金を積みば人間はいとも簡単に協力する。中身の分からないものでも、ある場所へ運んでくれと言えば運んでくれる。中身は麻薬かもしれない…爆弾かもしれない…あるいは細菌兵器かもしれないというのに。目の前の大金のために我欲をむき出しにし、まわりが見えなくなる」

「…」

「分かるだろう？欲望を抑え、人を統一するには宗教しかないのだ」

「…」

マシユーは考えた。考えて考えて反論した。

「あなたの言うことは一理あるかもしれない。しかし…戦争を引き起こすなんて間違ってる。それに…あなたも俺も細菌兵器に苦しめられたんだろう？だったら…だったら細菌兵器を使って何かをするなんて間違ってるよ！血で血を洗うようなもんだ！」

マシユーは必死だった。

「…」

ゼロはふと昔を思い出した。

「アラン…」

ゼロはポツリとつぶやいた。ゼロは自分の過去を思い出した。

「母さん…母さん…」

「アラン！アラン！っつかしおし！」

「母さん…戦争を…戦争を…」

「アラン！アラン…！！」

「…？」

マシユーはどこか上の空のゼロを見て、首をかしげた。

「…！」

ゼロは我に返った。

「そ、そう言えば…レイミアはどこだ!？」

「あの女か?あの女は別室で眠っている。心配はない」

「…」

マシユーは少し安心した。

「とにかく…戦争のない世界にするには人類全体を統一しなければならんのだ」

「…」

「無駄なことは止めるんだ。同じ悲劇を味わったお前を殺したくはない」

「…」

「約束しよう。確かに多少の犠牲者は出してしまふ。だがその後は平和な世界を築いてみせる」

「…」

マシユーは少し考えた。そして顔を上げ、話し出した。

「違うよ…」

「？」

「違うよ、ゼロさん。人類の統一なんてありはしない…出来ないんだよ。歴史を見れば分かるだろ?そうやって人類統一を目指した人はたくさんいる…でも出来なかった。無理なんだよ」

「…」

今度はゼロが黙った。

「今だってそうじゃないか。20年前に戦争が終わり、大きい戦争はないけど、小さな争いは絶えない。どこへ行っても貧富の差はある。仮に一時、統一できたとしてもどうせまた違う組織とか勢力が現れる。無理なんだよ、人類統一なんて」

「…」

「人間は自分勝手な生き物だよ。けど仕方ないんだ。受け入れるしかないんだよ。細菌兵器なんか撒いちゃいけない。考え直すんだ!」

マシューは強い口調で言い放った。

「…」

ゼロはしばらく黙っていたが、やがて話し出した。

「もうよい。とにかくお前たちをここから出すわけにはいかん。連れて行け」

「はい」

柱の影から数人の男が現れた。

「くっ！ゼロ！ゼロー！」

マシューはレイミアが幽閉されている部屋に連れて行かれた。

「…」

ゼロは何かを考えているようだったが、やがて自分の部屋へと戻っていった。

次の日。

「レイミア、大丈夫かい？」

「ええ」

「これからどうなるんだろうか…」

「そうね…」

「細菌兵器は…撒かれてしまうのかな…」

「…」

「ハロルドさんのほうは、どうなってるのかな…」

「うまくやってくれてるといいわね…」

その時

”ガチャ”

「二人とも、出る。ゼロ導師がお待ちだ」

「!?!」

マシューとレイミアはゼロの元へと連れて行かれた。

「昨日は眠れたか？二人とも」

「…」

「少し考えたんだが、ひとつ提案がある」  
「提案？」

「細菌兵器を撒くのをやめてやってもいいぞ」

「!？」

「ただし…！お前たち二人の命を犠牲に出来るならな」

「!？」

「その机にビンがあるだろう」

「…」

見るとビンが二つあった。なにやら不気味な赤い液体が入っている。

「それは今回撒く予定の細菌兵器だ。お前たち二人がそれをここで飲むというのなら…細菌兵器を撒くのをやめてやろう。どうだ？」

「!？」

ふたりは険しい表情になった。

「さあ、どうする？」

ゼロは笑っていた。

「…」

二人ともしばらく考えた。そしてマシューが言った。

「分かった。飲む。けど俺だけにしてくれ。この人は助けてやってくれ」

「マシュー!!」

レイミアは驚いた。

「それは駄目だな。お前たち二人の命が必要だ。それが条件だ」

「なぜだ？俺だけでもいいだろう？」

「駄目だ」

ゼロはマシューをまっすぐ見ていた。

「…」

マシューもゼロをまっすぐ見ていた。というより、にらんでいた。  
「分かったわ…」

レイミアが言った。

「レイミア！」

「マシュー、ありがとう。けど、あなただけを犠牲になんて出来ない。私も飲むわ」

「…」

ゼロは黙って見ていた。

「レイミア…」

マシューはレイミアを見つめた。

「けどゼロさん、約束して。絶対に細菌兵器は撒かないって」

「…、よからう」

ゼロはレイミアを見て言った。

「…」

二人はビンを手に取り、蓋を開けた。特ににおいはない。

「…」

二人は震えていた。お互いの手を強く握り締めていた。

「…」

ゼロはじっと見ていた。

「！」

二人は同時にその赤い液体を飲んだ。

「…！」

それはほとんど無味だった。しかしなんとなく苦い気がした。

「レイミア…」

「…」

レイミアは目をつむっていた。

「…」

ゼロは二人を見ていた。その時、

”ドーン！”

外で大きな音が鳴った。

「な、なにごとだ！？」

「ゼロ導師、そ、外に数台のシャトルが！」

「なに！？」

「…!?」

なんとなく体がおかしくなってきた気がしながらも、マシューはその情報を聞いていた。

「抵抗するな！お前ら！全員、手を上げる！」

軍服のようなものを着た数人の男が入ってきた。

「マシュー君かね？ハロルドという人から話は聞いている。もう大丈夫だ」

「!?」

「…」

ゼロは動揺していた。周りで軽い銃撃戦が起こっていた。

「無駄な抵抗はやめろ！」

「おとなしくしろ」

あわただしくなる場内。

「マシュー君、大統領も抑えた。もう戦争の心配はない」

「そう…ですか…」

「く…」

ゼロは悔しがっていた。

「死ねえ！」

ゼロはポケットから拳銃を出した。

「…！」

とっさにその軍服の男はゼロを撃ってしまった。

”バンッ！”

「がっ！」

銃弾はゼロの胸に当たった。

「ゼロさん…！」

ゼロに近寄るマシュー。

「ふふふ…どうやら私の計画は…失敗のようだな。マシューよ…」

「ゼロさん…！」

「マシューよ…安心しろ…お前が飲んだのは…ただの着色した水だ…死にはしない…」

「!？」

「マシユーよ…」

「ゼロさん!」

「あり…がとう…」

「!？」

ゼロは息絶えた。

「ゼロさん!ゼロさん!」

ゼロの顔は、穏やかだった。ゼロは本当は誰かに止めてほしかったのかもしれない。

マシユーは涙を流した。レイミアも涙を流した。

こうして、クロスバードの計画は失敗に終わった。

数日後。

マシユーとレイミアは、ローランド政府が用意した格安の公営マンションに住んでいた。一緒に住んでいるわけではない。だがとなりどうしだった。

仕事は、どちらも政府関係の仕事を紹介してもらっていた。ただし場所は違う。

ある晴れた日。

二人はマンションのベランダにいた。

「いい天気ね」

「そうだね」

「ハロルドさんは、仕事忙しそうね」

「そうだね。まだまだ後処理が残ってるからね」

「マシユー、あの時あなたすごかった…。大して迷いもせずあの水を飲んで…」

「え?...そうかな?」

「そうよ。私は恐かったわ…」

「いや...でもね...何となく思ったんだ」

「？」

「レイミアと一緒に死ねるなら…まあ…いいかなって…」

少し気まずい空気が流れた。

「いや…その…」

「マシユー…ありがとう」

レイミアはマシユーに軽くキスをした。

「…！」

「…」

レイミアはマシユーを見つめていた。マシユーもレイミアを見つめていた。

「レイミア！」

マシユーはレイミアを強く抱きしめた。晴れわたる空は二人を祝福しているようだった。

世界がどう変わろうと、人間がいつまでも争い続けようと、愛する人といつまでも…愛する人とどこまでも…。

終わり



(後書き)

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0852s/>

---

ザ・プロジェクト その3

2011年3月31日16時41分発行